

令和 5 年 5 月 18 日現在

機関番号：32520

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K13112

研究課題名（和文）亡霊のアイランドを描くジョイス 「悪夢」の歴史としてのディアスポラ

研究課題名（英文）James Joyce and Irish Diaspora: Haunting History as a Nightmare

研究代表者

小林 広直（KOBAYASHI, Hironao）

東洋学園大学・グローバル・コミュニケーション学部・准教授

研究者番号：60757194

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、ジェームズ・ジョイスの作品に見られる亡霊の表象が、大英帝国とカトリック教会によって二重に支配されていたアイランドの歴史をどのように反映しているかを考察した。植民地としてのアイランド、あるいはその結果民族離散を経験したアイランドの歴史の犠牲者とも言えるそれらの亡霊たちと出会い、対峙する各主人公を描くことで、ジョイスは来るべき国家としてのアイランドの行く末を示していると結論付けた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究が亡霊（的）という言葉で明らかにした特性は、誰もが歴史の中に生きており、その時代、あるいはその地域特有のイデオロギーの影響を受ける以上、その死には政治的な歴史性が付きまとい、その死の意味を考えることは後世に生きる者の責務であるという倫理的応答可能性の問題である。この歴史という亡霊は、アイランドに限らず、どの国にも当てはまる現象だ（例えば、本国においては第二次世界大戦における加害性と被害性の両面の問題として）。その意味で、本研究はアイランド文学や英文学に限定されることなく、学際的な意義、そして現在を生きる私たち一人ひとりにとっても社会的な意義を持つと思われる。

研究成果の概要（英文）：This study has examined how the representations of ghosts in James Joyce's works reflect the history of Ireland which was dominated by both the British Empire and the Catholic Church. Joyce depicts each protagonist, as his alter ego, encountering and facing these ghosts who are the victims of Colonial Ireland or Diasporic Ireland. By doing so, as my research concludes, he implies the future of Ireland as the nation yet to come.

研究分野：英文学（アイランド文学）

キーワード：ジェームズ・ジョイス James Joyce アイランド ディアスポラ ト라우マ モダニズム 憑在論  
ジャック・デリダ

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、筆者が2018年2月25日に早稲田大学より博士号(英文学)を授与された博士論文『ジェームズ・ジョイスの作品における亡霊表象の研究 ―トラウマ、事後性、歴史―』(審査員:大島一彦、榎木伸明、金井嘉彦)及びその執筆段階で採択された2つの科研費(2016~17年度「若手研究(B)」:「ジェームズ・ジョイスは歴史の悪夢を見るか:亡霊表象の理論/歴史的読解」2017年度「特別研究員奨励費」[2018年度以降は本務校が決定したため辞退]「ジェームズ・ジョイス作品の亡霊表象におけるトラウマ・ナラティブとしての歴史研究」)を発展的に継承する研究課題として位置づけられる。

私はこれまで、ジョイス作品の主要登場人物が会う亡霊の表象に着目し、作者自身の「個人史(personal history)」と植民地アイルランドの「国史(national history)」の両者におけるトラウマ的経験がテキストに反映されていることを、『ダブリナーズ』(1914)、『若き日の芸術家の肖像』(1916)、『ユリシーズ』(1922)の3作品において分析した。方法論としては、難解と名高いジョイス作品のテキストを徹底的に「精読」することに基礎を置きつつ、3つの文学理論(Postcolonial Theory / Trauma Studies / Ghost Studies)を参照し、ジョイスは自身と植民地アイルランド双方の「トラウマの歴史」を書くことを通じて、死者/亡霊に対して倫理的な「応答」を試みていたことを明らかにした。

しかし、奇しくも『ユリシーズ』の二人の男性主人公が、カトリック・アイリッシュのステイヴン・デダラス(当時の作者とほぼ同じ経歴・年齢、学歴、母の死を持つ)とユダヤ系アイルランド人のレオポルド・ブルームであることに象徴されるように、ジョイスは己の分身や個人史を描くことから出発し、より広い歴史へと視野を拡大させていった(最後の作品『フィネガンズ・ウェイク』(1939)は、ダブリンの地誌にあらゆる人類の歴史を詰め込んだ作品とも言われる)。言うまでもなく、『ユリシーズ』でステイヴンが述べる歴史観(「歴史とは……僕が目覚めようとしている悪夢なのです」)は、作者自身の歴史観の反映であり、それはすなわち「カトリック教会」と「大英帝国」による、二重の「植民地支配」に関わる。この点については、亡霊表象に着目した上述の博士論文で(瑕疵はいくつもあるにせよ)ほぼ網羅的に追究してきたと自負している。しかし、博士論文の執筆過程において、自身はアイルランド人であると自覚しながらも、他のダブリン市民からはユダヤ人として「迫害」の憂き目に遭うブルームを分析する際には、19世紀半ばにアイルランド人とユダヤ人双方が経験した「ディアスポラ(民族離散)」まで視野に入れる必要があると気づかされた。ブルームの死んだ(祖)父と息子は「亡霊」としてその姿を現す際に、何よりもユダヤ人として表象されていることを巡って、「なぜブルームはユダヤ人として表象されるのか」という古典的ではあるが、未だ確定的な答えが得られていない問いを本研究では改めて検証する。

## 2. 研究の目的

ジョイスとユダヤという主題については、初期の批評より注目されてきたが、1990年代後半に発表された3つの研究書が今日では古典的研究として名高い(Ira Bruce Nadel(1996)、Neil R Davison(1998)、Marilyn Reizbaum(1999))。しかし、これらの研究で十分に論及されていないと思われるのは、以下の2点である。(1)ジョイスが『ユリシーズ』の執筆を開始した「トリエステ」での体験の再検証(作家のイタロ・ズヴェーヴォを始めとして、多くのユダヤ人の知己を得たこと)(2)19世紀半ばの「大飢饉」に端を発する移民と亡命によって、大量の人口流出を経験した「ディアスポラ」の分析である。

(1)については、4つの伝記(Gorman, Ellmann, Costello, Bowker)に加え、Peter Hartshornの*James Joyce and Trieste*(1997)やJohn McCourtの*The Years of Bloom: James Joyce in Trieste, 1904-1920*を再読し、さらにはトリエステでジョイスと同居していた作者の弟スタニスロースが記したTrieste Diary(未刊行だが、コーネル大学図書館で閲覧可能)を分析することで、ジョイスがユダヤ人という民族的「他者」に出会ったことの意義を再考する。(2)については、2000年以降、歴史学分野で隆盛を極めている「アイリッシュ・ディアスポラ研究」の知見を参照する。筆者は2018年5月に『ユリシーズ』におけるハンガリーのユダヤ人表象について学会発表した際に、当時アイルランドで東欧ユダヤ人はどのように処遇されてきたかを検証した。この際に、当時の雑誌や新聞などのアーカイヴ調査が、新しい論点を発掘する上で有効であるとの実感を得た。

上記の2つの論点が見出されたことにより、筆者がこれまで分析してきた、ジョイス作品の登場人物のトラウマ的体験に反映される「悪夢」としての歴史(個人史と国史の双方)という観点に、作者にとっては文化的「他者」でありながら、ディアスポラという民族的トラウマにおいては共通する、迫害の歴史を持つ「ユダヤ性」を追加することができる。これは国内外を問わず未だ十分に論及されていない主題であり、博士論文を単著にまとめ上げる際に有力な論点となるだろう。ジャック・デリダの「憑在論」(『マルクスの亡霊たち』)が明らかにしたように、亡霊が亡霊たり得るのは、彼らが皆安らかな死を得られずに、生者に「事後的な」解釈を求めるからであり、亡霊の出現とは、私(たち)はなぜ非業の死を遂げたのか、それについて「応答」せ

よ、という生者への倫理的要請だといえる。以上のことから本研究は、文学研究全般に通底する亡霊表象、及び迫害の歴史表象の学術的探求においても新しい視座を提供することになるはずだ。それと同時に、アイルランドのような旧植民地国家だけでなく、「戦勝国」や「敗戦国」の別を問わずあらゆる国民国家が、いかに過去の歴史(的トラウマ)と対峙し、倫理的な応答をすべきかという学際的且つ今日的主題に接続される可能性を秘めている。

### 3. 研究の方法

90年代以降のジョイス批評には、大別するならば2つの潮流がある。「ポストコロニアリズム」に依拠した理論的なアプローチと、「ニュー・ヒストリシズム」に依拠した歴史的なアプローチである。これはアイルランド文学研究全般にも妥当する傾向であるが、中でも移民/ディアスポラ研究は、2000年以降ほぼ毎年研究書が出版されている。特に2018年8月に出版された *Irish Questions and Jewish Questions: Crossovers in Culture* では、『ユリシーズ』のブルームが「新たなアイデンティティ創出」の例として前書きで言及されるものの、残念ながら詳しい分析は加えられていない。いずれにせよ、初期のジョイス批評から一貫して論及されてきたアイルランドとユダヤを結ぶパラレル関係は、奇しくもほぼ同時期の19世紀半ばに起きた、アイルランドの「大飢饉」と、東欧におけるユダヤ人迫害の「ポグロム」の両面から再検討されるべきであろう。日本でも結城英雄教授や戸田勉教授、田村章教授などがブルームのユダヤ性に着目した論考を發表しているが、上述したような2000年以降のアイリッシュ・ディアスポラの研究成果は十分に反映されていない。本研究はこれまで筆者が取り組んできた方法論「文学理論とアーカイヴ研究」を援用しつつジョイス作品の「精読」をもとに、これら最新の歴史研究を取り込むことで、国際的にも未だ十分に展開されていないジョイス研究を行うことができると考えている。

### 4. 研究成果

#### (1)2019年度の研究成果

2019年度は、7月にアイルランドのダブリンで開催された国際学会(IASIL)で口頭発表を行った。『ユリシーズ』の主人公の一人であるスティーヴン・デダラスの死んだ母と、作品内で埋葬されるパディ・ディグナム(もう一人の主人公、レオポルド・ブルームの友人)の両者を亡霊、および動物という観点で共通性を見出し、大英帝国とカトリック教会という「二人の主人」に支配されたアイルランド人の歴史的不遇が反映されているという論旨であった。現地のアイルランドの研究者だけでなく、世界中のアイルランド文学の研究者と交流し、議論や意見交換ができたことは大変有意義だった。

また2019年6月より、2か月に1度のペースで、一般読者を対象にした読書会を日本ジェイムズ・ジョイス協会の若手研究者2名(南谷奉良氏、平繁佳織氏)と共に主催し(「2022年の『ユリシーズ』 スティーヴンズの読書会」)年度内に第1~第5挿話までを再読した。その際、各挿話を改めて精読しただけでなく、先行研究にも目を通し、各回のあらすじを書き、読みどころを解説した。本会は所謂学会ではないが、研究成果を広く国民に還元するという科研費の本義に鑑みると、一定の貢献ができたと考えている。

本研究テーマとの関連では、19世紀以降のアイルランドの「民族離散(Irish Diaspora)」に関して、一橋大学の金井嘉彦教授のゼミに参加することで、George MooreやPadraic Colum(彼らもまた広い意味で「亡命作家」に数えられる)のテキストを精読する機会があったことは非常に有意義であった。また、Padraicの妻、Mary Columの *Life and Dream* を精読することで、20世紀初頭にアメリカへ移住した夫妻が多くの文学者と交わりながらどのような経験をし、旧世界と新世界の文化的差異を考察していたかを学ぶことができた。

#### (2)2020年度の研究成果

2020年度は、ジェイムズ・ジョイスの短篇集『ダブリナーズ』の最後を飾る「死者たち」における亡霊表象についての論文を發表した。本作に描かれる「亡霊」は、一義的には主人公ゲイブリエルの妻、グレタが故郷のアイルランド西部で恋愛関係にあった死んだ恋人フューリーのことであるが、同時に、ゲイブリエルの夫としてのアイデンティティを突き崩し、他者性を自覚させる契機として描かれている。このことは象徴的なレベルにおいて、植民地だったアイルランドの歴史的状況から背を向けていた彼にとって、自身の知らなかった妻の過去が、祖国それ自体の「悪夢」としての歴史と重なり合う、すなわち個人史と国史が重層化されていることを意味する。また、この論文ではジャック・デリダの「歓待」論を援用した。「歓待」は政治的には、いかに亡命者や難民を受け入れるかというDiasporaの議論にも通底するため、今度も探求してゆきたい。

また、前年度の研究成果に記述したように、2019年6月より、2か月に1度のペースで、一般読者を対象にした読書会を、日本ジェイムズ・ジョイス協会の若手研究者2名(南谷奉良氏、平繁佳織氏)と共に主催している(「2022年の『ユリシーズ』 スティーヴンズの読書会」)。20年度は新型コロナウイルスの流行によってオンラインでの実施となったが、これを機に第6~第10挿話を再読することができた。

本研究テーマ(19世紀以降のアイルランドの「民族離散(Irish Diaspora)」)に関しては、Mary Columの *Life and Dream* の翻訳(共訳)を行うことで、亡命先のアメリカにおいてアイリ

ッッシュ・アメリカンがどのようなコミュニティを形成していたかを分析することができた。

### (3)2021年度の研究成果

2021年度は、2022年2月2日の『ユリシーズ』出版百周年記念論集へ寄稿した論文「手紙を読む／読まないブルームを読む 『ユリシーズ』の手引きとしての手紙」(査読有)の加筆修正、および同論集への「あらすじ」(第5挿話と第14挿話)さらに『ユリシーズ』を読むための「コラム」として「ユダヤ人」と「検閲、裁判」の項目を執筆した。中でも、「ユダヤ人」のコラムを執筆する際に、『ユリシーズ』の主人公であるレオポルド・ブルームがユダヤ人の父を持ち、自身はアイルランド人としてのアイデンティティを持っていることの意義を、先行研究を参照しつつ、再考することができた。また、上述の拙論についても、「亡霊」という言葉こそ使っていないが、『ユリシーズ』の一日においてブルームの脳裏には、妻の恋人であるポイランの存在、および彼が文通上で「不義」を行うマーサの手紙の文言が、まさに取り憑いていたということも明らかにした、という点で、本研究の一つの主題である亡霊についての考察が、また一歩着実に進んだと自負している。

また、上述の通り、2019年6月より、隔月のペースで、一般読者を対象にした読書会を、日本ジェームズ・ジョイス協会の若手研究者2名(南谷奉良氏、平繁佳織氏)と共に主催している(「2022年の『ユリシーズ』 スティーヴンズの読書会」)。それに伴い第11~第16挿話を再読することができた。

### (4)2022年度の研究成果

2022年度は、『ユリシーズ』100周年を記念するイベントとして、2月2日より「22Ulysses ジェームズ・ジョイス『ユリシーズ』への招待」という全22回のオンラインイベントの発起人の一人として、運営に携わった。日本ジェームズ・ジョイス協会の研究者を中心に各挿話についての講演を行ってもらい、私自身も第1回、第2回、第6回、第21回、第22回に登壇した。このイベントを通じ、広く一般読者に『ユリシーズ』の魅力を伝えることに尽力したが(各回平均して150名以上の参加者があった)、これは研究成果を国民に還元するアウトリーチ活動のひとつとして一定の貢献ができたと考えられる。

また、6月には日本ジェームズ・ジョイス協会第34回研究大会(於大妻女子大学)口頭発表を行い(「エゴイストは歴史を学ぶ事ができるか? 『ユリシーズ』におけるパトリオティズム」)、ジョイスがpatriotおよびpatriotismという言葉の初期の批評から、『ユリシーズ』に至るまでのような意味で用いてきたか、その変遷を辿った。また、10月には日本英文学会関東支部第22回(2022年度秋季大会)シンポジウム1「亡霊文学を見つめ直す」のパネリストとして登壇し、「亡霊が亡霊に出会うこと ジェームズ・ジョイス『ユリシーズ』第15挿話「キルケ」再訪」という題で、発表を行った。しばしば象徴的父子関係を結ぶとされるブルームとスティーヴンだが、生後11日で夭逝したブルームの息子ルーディの亡霊の表象を分析することで、死者への罪悪感が両者を結ぶと共に、亡霊的な他者性を帯びた「移民」であるユダヤ系アイルランド人のブルームだからこそ、息子の可能態的な未来に想いを馳せることができると結論付けた。

### (5)研究成果の国内外における位置づけとインパクト、今後の展望

本研究の成果の独自性は、ジョイス作品の亡霊表象には、作家自身の個人史とコロニアル・アイルランドの国史の双方が刻印されていることを明らかにした点にある。ここに加えて、アイルランド人とユダヤ人が双方に経験した「民族離散(ディアスポラ)」という観点を導入することで、故国を失うことの痛み、あるいはブルームに見られるように、アイルランドに生まれながら、十全にアイルランド人として他の人々から認められない、つまり外国人/他者として差別されてしまうことの痛みを読み取ってきた。この論点は、ジョイスの時代から約100年を経て、より一層グローバル化が進行した現代世界において、人々がどのように自国の過去の歴史と対峙すべきなのか、あるいは民族的、あるいは宗教的にマイノリティである人々がその国家をいかに愛することができるか、という問題へと接続可能である。その意味でも、本研究はアイルランド文学や英文学に限定されない、学際的な問題意識を提供できると自負している。

今後の展望としては、本研究から発展して、22年度に検討したナショナリズムとパトリオティズムの双方がジョイス作品にどのように表象されてきたかを継続的に考察してゆく予定である。これによってアイルランド人の両親を持ち、アイルランドに生まれ、多数派の宗派であるカトリック教徒であったスティーヴンが、教会から離れることの意義、さらには彼が会おうブルームが上述の通り、アイルランドに生まれ、自身をアイリッシュと認識しながらも、他のダブリン市民から外国人/他者として差別されることの意味は何なのか、この論点をさらに深めてゆくことが可能であると思われる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Hironao Kobayashi	4. 巻 30
2. 論文標題 How James Joyce Recycles Popular Culture: References and Nods to Thomas Moore in "An Encounter" and "The Dead."	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東洋学園大学紀要	6. 最初と最後の頁 37-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Hironao Kobayashi
2. 発表標題 Paddy Dignam's Metempsychosis and Irish History as a Nightmare--Representations of Dogs and Ghosts in James Joyce's Ulysses
3. 学会等名 THE CRITICAL GROUND: The 2019 Conference of the International Association for the Study of Irish Literatures (Trinity College Dublin, Ireland, 25 July 2019) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小林広直
2. 発表標題 エゴイストは歴史を学ぶ事ができるか？ 『ユリシーズ』におけるパトリオティズム
3. 学会等名 日本ジェイムズ・ジョイス協会第34回研究大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小林広直
2. 発表標題 亡霊が亡霊に出会うこと ジェイムズ・ジョイス『ユリシーズ』第15挿話「キルケ」再訪
3. 学会等名 日本英文学会関東支部第22回（2022年度秋季大会）シンポジウム1「亡霊文学を見つめ直す」
4. 発表年 2022年

## 〔図書〕 計2件

1. 著者名 金井嘉彦、吉川 信、横内一雄、新井 智也・岩下 いずみ・河原 真也・小林 広直・田多良 俊樹・田中 恵理・戸田 勉・平繁 佳織・南谷 奉良・桃尾 美佳・山田 久美子・湯田 かよこ	4. 発行年 2022年
2. 出版社 言叢社	5. 総ページ数 352
3. 書名 ジョイスの挑戦	

1. 著者名 東雅夫・下楠昌哉編、小林広直（229 - 52頁担当）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 450
3. 書名 『幻想と怪奇の英文学IV 変幻自在編』	

## 〔産業財産権〕

## 〔その他〕

<p>2022年の『ユリシリーズ』 スティーヴンズの読書会（共同開催）  <a href="https://www.stephens-workshop.com/ulysses-in-2022/">https://www.stephens-workshop.com/ulysses-in-2022/</a>          ジョイスの手 はじめての『ユリシリーズ』（共同執筆）  <a href="https://webmedia.akashi.co.jp/categories/733">https://webmedia.akashi.co.jp/categories/733</a>          出版100周年特別企画：2022年×全22回のオンラインイベント 22Ulysses ジェイムズ・ジョイス『ユリシリーズ』への招待  <a href="https://www.joyce-society-japan.com/22ulysses/">https://www.joyce-society-japan.com/22ulysses/</a></p>
---

## 6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

## 7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

## 8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------